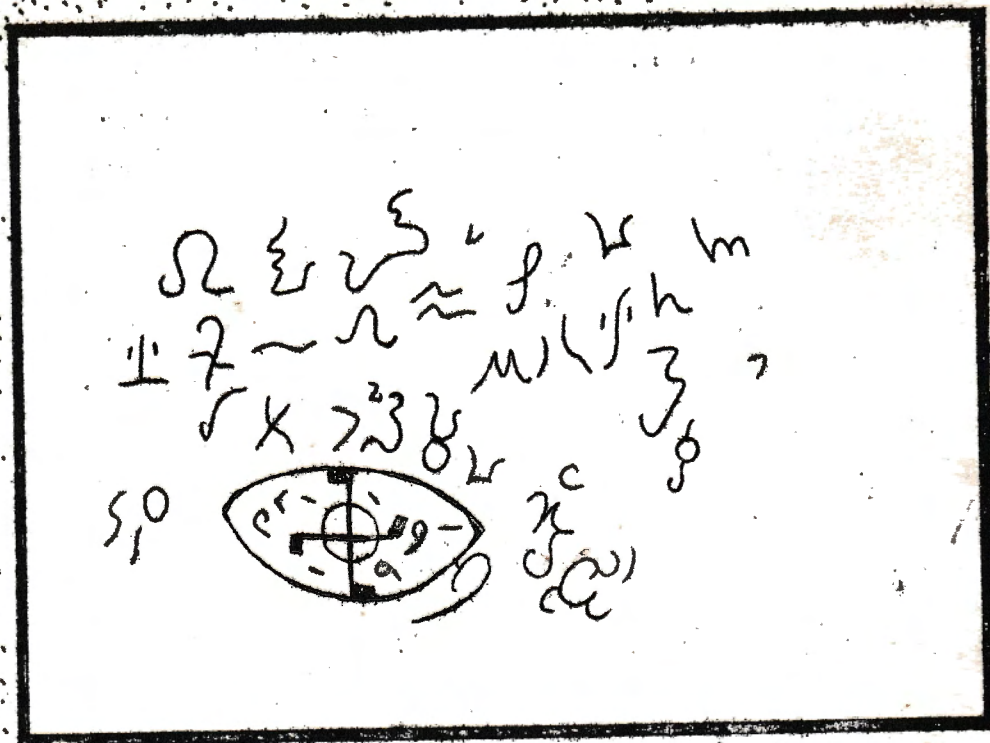


PRS

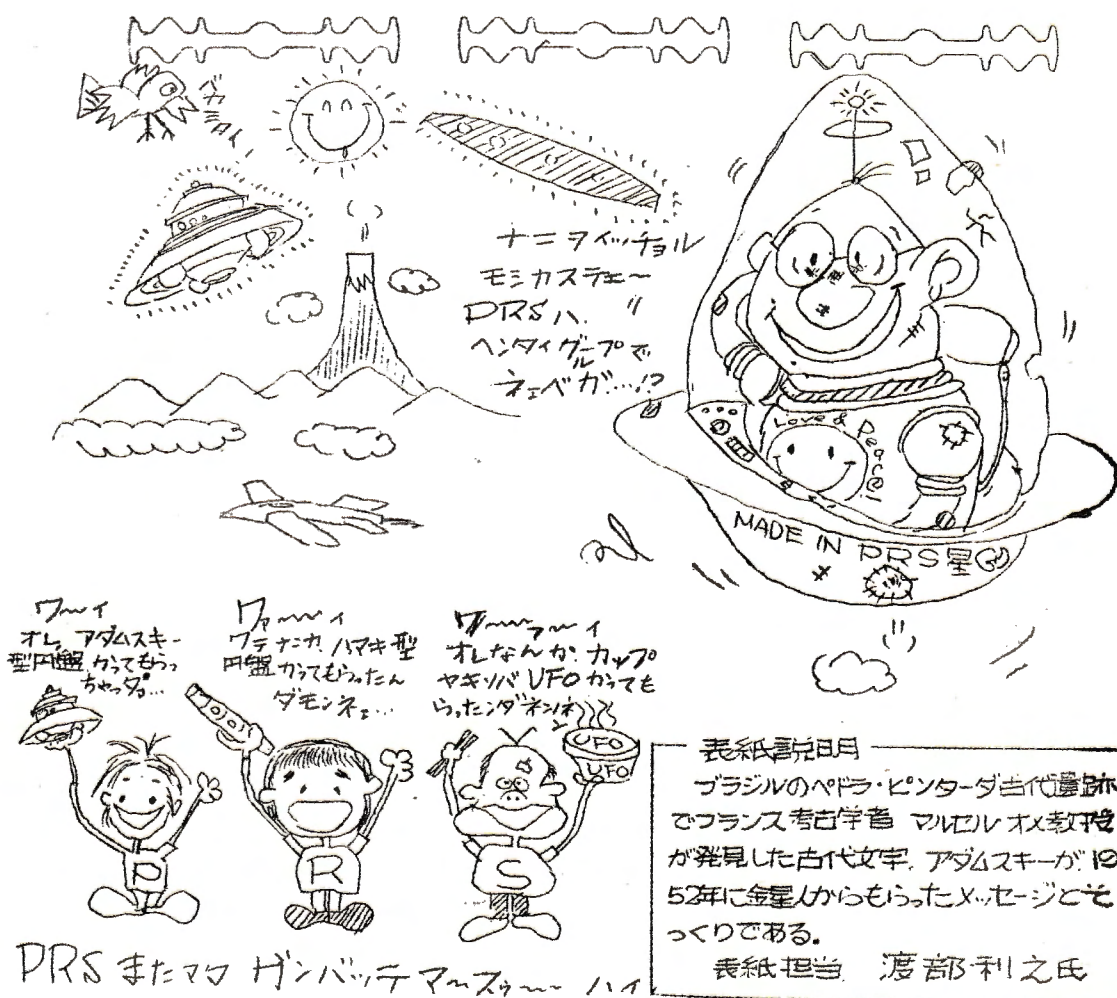
ユニバーサルメッセージ

2



PRSユニバーサルメッセージ2 もくじ

アダムスキーの思い出	アリス・ポアロイ	1
日本GAP総会大盛況		8
UFOと古代遺跡	山口博之	10
「宇宙からの訪問者」との邂逅	田中潤子	12
土星旅行記	ジョージ・アダムスキー	14
続・PRS愚話		
PRSの芋煮会	小松文子	19
PALACE of PRS		20



アダムスキーの思い出

アリス・ポマロイ

(GAPニューズレター49号より転載)

著者アリス・ポマロイ女史はかつてアダムスキーのよき協力者であった人で、自死後にも米国GAP理事長アリス・ウェルズの右腕として活躍している世界GAP有数のコワーカー（協力者）の一人である。今回日本GAPの要請により特に亡き師の思い出をつづった一文を寄せられた。これはアダムスキーに親しく接した人の貴重な記録である。

ご依頼の原稿をお送りします。日本人は精神的に深

りでお読み下さい。この記事は人々に奉仕する上で深い意義をもつものであり、また生命それ自体の象徴化でもあります。最も私の心になったものです。

味のある感受性の強い国民であることを知っておりますので、その線に沿ったもの、心をなやまして、い出そうと努力しました。一個人の書いた記事でアダムスキーを正しく評価することは無理でしょうが、これは氏の人格の一断面ですからそのつも

この記事をご依頼下さったことにたいして、あなたとその読者の方々に深く感謝いたします！ これを書くことは私にとって特別な喜びでした。私は初めてアダムスキー氏の講演会に出席したときの録音テープを取り出して少しづつくり返し聞きながら思い出を新たにしました。そして氏が私に与えてくれた生命の深いフリーリングを再度よみがえらせたのです。とかく人間は生きることに熱中しがちで、ふり返って過去を思い出すことを忘れるものです。したがって今これを書いていられると氏に関する事や氏が話された事などがふたたびあややかに浮かび上がってきます。これは私が時折必要とする生気づけです。あら、こうしてあなたを援助することをうれしく思います。

私はアダムスキー氏にたいしてその晩年の最後の一年間だけ、しかも亡くなられる頃まで親しく接したにすぎません。最初にお会いしたのは一九六四年の復活祭の週間のことで、三百五十マイルを旅して

-2- 二日間氏といっしょにすごしました。氏がこのニュ

ーイイングランドを離れたのは、それからちょうど一年後のグッドフライデー(受難日)の朝のことです。氏はそのままワシントン市へ向かいましたが、一週間後の金曜日の夕方に亡くなられました。

氏と初めてお会いしたあと、氏は私という人間の正体を見抜かれて、過去世からの私を認識されました。——後になって氏は、過去の世において二人はいっしょに働いたことがあるのだと申されました。

ので、それ以来二人は文通していましたが、その年の十月に初めてニュイイングランドへ来られて、私の家族とともに八日間をすごされました。翌年の春になって氏はふたたび当地へ来られ、約三週間をすごされて、この間私たちはインタビューや会合などで多忙をきわめました。密接に働くことができました。

した。あたかも生来知り合っていた親友のような感じでしたが、これはすばらしい体験でした。それ以来私は多くのアダムスキー協力者の方にたいしてもこれと同じ感じを持ち続けています。自分の体験からみて私は人間がたしかにみな兄弟であると感じています。いつか日本のみなさんとお会いできれば、それを望んでいます。やはり同じ感じがするでし

よう。

私たちの仕事には大きな未来が待ち受けています。この活動に専念して人間の宇宙的な生き方の達成という仕事を成就することができれば、ふたたびアダムスキー氏に会えると思います。別な惑星のプラザーズにも会えるでしょう。これは価値のある願いであり夢でもありますから、実現するように努力するつもりです。たとい会えなくても私たちの仕事の達成はきわめて重要です。

アダムスキー氏の話によれば、テレパシーの実行に際しては受信者の姿をよく知っていてそれを心中に描かないと、送信が困難だということですから、ここに私の写真を添えておきます。みなさん方から私宛に寄せられる写真も非常に役立ちます。

* * *

それは数百名名を取寄でぎる大きな講堂で、満員に近い盛況でした。ときどき口をついて出るアダムスキー氏のユーモアによって爆笑がうずまく中を、聴衆は氏の講演——他の惑星から来る人々やその宇宙船、地球へ来る目的などの話を熱心に聞き入っていました。

氏は最初にUFOの分野にはいった頃のこと、

砂漠における会見、一九五九年までに十八カ国で講演を行なうようになったいきさつなどについて話しています。その説明によると、地球人にとって不可能なUFOの飛行ぶりは地球人の知性にたいする手ヤレンジであり、それによって地球人は宇宙開発計画を始めたといひます。「これが(円盤出現が)どんなに福音であつたか、おわかりですか」と氏は熱心に語ります。「人間が円盤についてどのように考えようが、円盤は地球人にたいして大きな奉仕をやつたのです！ 円盤は地球人に未知の領域を探険させることになりましたが、今後も宇宙開発の方向にむかつて絶えず仕事と機会を与えることでしょう。戦争という絶え間のない脅威にもかかわらず、われわれは知識と学習とによって生きることになるでしょう。地球の文明にとって唯一の希望である人類の黄金時代を迎えることになるでしょう！」

あまりにも早く講演は終了しました。集会がすんでから氏は身をひるがえして壇を離れます。背後には休息用の控え室へ通じるドアがあるのですが、氏はその方へ行かないで、ホルルの床へおろされた小さな階段を降りて行くと、多数の聴衆が席を立ててこの新来の友の所へ殺到して取り巻きました。

以上がアダムスキー氏を初めて見たときの光景です。その後氏を知るようになり、共に働くようになってから、これは典型的な光景であることがわかりました。氏は決して安易な逃げ道を選ばず、常に自身の内部から確実にわき起こってくる生命の真実によつて支えられ



た音楽に耳をかたむけます。進歩するにつれて宇宙的な生き方はいわゆる困難な道となります。アダムスキー氏はそれを教えたばかりではなく、精一杯にそのような生き方をした人であることがわかりました。

氏は同朋を愛し、あくことなく人々とともに過ごし、人々と語り合い、多くの質問に答え、自分の生活と仕事に関する最も深い関心事を人々にわかち与えました。

その努力のためにしばしば過労におちいりました。それでも奉仕の願いをもってこの生き方を遂行しました。

その夜講演が終わってから氏が前方のステージからホールの後方にある休憩所まで通路を歩いてゆくのに四十分かかりました。群集に取り巻かれながらも氏は品位を保って移動し、質問が出るたびに立ち止まって解答を与えるので、いつときに数歩しか歩けません。こんなふうに行っているとなますます多くの質問が出るばかりですが、これはちやうど生命そのものが自然の諸法則のなかを永遠につながれた出来事の連鎖として移動してゆくのに似ています。

だれしも一篇の記事ですべてを語ることはできませんし、同一の体験をしても万人の見方はそれぞれ異なります。その夜の講演やその後の交わりにおいて明らかになったのは、アダムスキー氏が人々にたいして果てしない忍耐力と謙虚さを持っているということです。氏が普通の人であらうと、この世における偉大な人であらうと、万人は等しく氏の兄弟なのであり、氏はそのように人々に接してきたのです。

氏の目は魅惑的で、常に人々と調和して変化し、自身の実体の多くの面を反映していました。他人を見るときは記憶の書(アカシック・レコードといわれるもの)々すなわち相手の魂に刻まれた生命の言葉を読み取ることができたのです。その目が深

味をたたえた、何かを探索するような黒い知恵の泉であるときには、私は氏の凝視から目をそらすことはできませんでした。しかも氏は宇宙船に乗ったブラザーズについて述べるときと同様に、自分の見た物を非難することなく、ただそれを理解するだけでした。

ときとしてその同じ目が燃えることがあります。これは氏の決意と深い確信の力がわき起こったときにそうなるので、これによって反対者たちや非難・嘲笑にたいして断固たる前進を続けることができませんでした。宇宙の法則から成る原理に支えられている氏は、その理解力によっていかなる討論においても多くの分野にわたる驚くべき知識をもって自身を抑制することができたのですが、しかもこの世界の権威者にたいして自分の不適当な発言があれば、ただちにいいないな態度でそれを認めました。氏の揚げ足をとろうとする人にたいしては——ときたまそんな人がいたのですが——自分の主張を深く立証する回答をいつも用意していました。

また、氏の強い顔には親切さとおだやかさがたたえられており、理解力と深い憐れみを示していました。あるとき一人の親しい仲間が氏にむかって極端

に侮蔑的な横柄な態度を示したことについて私が質問したら、「私は彼を傷つけたくない」と氏が言ったことがあります。しかしその人にたいしては眞理そのものが報いました。氏は必要とあれば人間の理解を助けるために遠慮なく宇宙の法則の性質を述べるからです。

しばしばエゴは「知る者(創造主)」に敬意を表して服従する必要があります。宇宙の法則においては、過失をおかすことは当事者に責任を伴うとともに進歩の特権でもあります。そして自己の過失を認めることは恥辱よりも名誉です。この重要さを認めて理解するのはときとして地球人にとっては困難ですが、アダムスキー氏はこれにたいして忠実でした。

氏は各個人についていつも深い関心を示し、容易に目標に達しないにしても努力する人を祝福しました。しかも氏がどんなに人々を愛してそれを助けようとしたにしても、自身の内部の眞理を認めようとしなない人にはほとんど望みがないことも知っていました。結局、人間は永遠の生命の道をただ一人で歩むのです。

この賢明な眞理以上に物事をよく知っている人間は存在しません。

氏は素朴な人なので素朴な物事を楽しんでいました。花を愛して友達のように話しかけたり、絵画や写真を愛好したり、人々や場所や出来事などの思い出を楽しんだりし、自分の仕事を援助してくれる人のすべてに心から感謝して、簡潔な言葉で次のような札を述べていました。「あなたのご親切を決して忘れません」。氏は完全な人ではなく、他人と同じような人間らしい欠点もありましたが、回顧すればそれらは問題とにならないようです。ときどき氏の目はするどいユーモアのセンスで輝くことがあります。あるときテレビ出演に関する電話の交渉がすんだあと、思いがけない喜びに胸をはずませる少年のように「さあ、みんなをまいらせてやるぞ」と冗談をとばしていました。

「人生は気楽な態度で生きるべきだ」というのが氏の口ぐせの忠告でした。氏とともに働いた人たちはこの生き方をまのあたりに見えています。あるとき講演会中に工合のわるい事が起こり、上映されている映画がたびたび停止したり急に動いたりしたために故障をなおそうとして努力しているうちにフィルムが

私アリスの心がこだまします。

衆はいらいらしてあざけりながら騒ぎ始め、これは故意のたくらみだと言う人もありますし、不快な顔をして出て行く人もあります。結局映画は効果的ではなかったにしても全部上映されました。フィルムがもとどおりになるまでのあいだずっとアダムスキ氏は冷静さを保ち、観衆からの質問に応じることによって待ち時間をうめ合わせました。私たちが最後に劇場を出たとき、驚いたことに氏はいつもの態度のままで陽気にはしゃいでいて、次の事態にそなえていました。

聴衆の面前で自分をよく抑制できる氏は、多くの講演を通じて非常な努力を払った上でこの抑制力を身につけたものと思われます。というのは氏は氏ももとは人並みにしゅう恥心があり、個人的に自分にあてられるスポットライトをきらったからです。「自分は一体何をやってきたというのか」と氏はよく言っていました。「この豊かな祝福を受けるに足るほどの事を――私はこんな名誉を（ブラザーズからコンタクトされた名誉を受けるほどの価値はないのだ）氏のよいうな人を知って共に働く特権を与えられたことにたいして「自分は一体何をやってきたというのか」と

私にとって最も忘れがたい思い出は、二人です。したある静かな夕方の短い対話です。文字どおり氏の足元の床の上にすわった私にむかって氏は質問しました。氏自身の内部で知覚していた一つの心象をゆっくりと少しずつ引き出してゆくのです。師と弟子として二人はあれこれと語り合い、氏が好んで用いた一つのパターンを追求してゆきました。「私はあなたに何も教えることはできない。ただあなたの内部にすでに存在している何かを気づかせるだけだ」と氏は申されます。問題点の各部を調べたあとで、全体が浮かび上がってくるのでした。二人の意見が一致したのは次のとおりです。

「十分に生きねばならないわれわれの人生は愛と奉仕の生活でなければならぬ。こうして互いに相手を高揚させ合うのである。人は自分の必要物を常に知るけれども、それは宇宙の意識に喜んで仕えることによつてのみ満たされるのである。

創造主はその子たちにたいして何も否定はされないが、子たちが喜んで否定されることを望んでおられる。時間・エネルギー・努力・愛など、他人のための犠牲は常に期待以上の報いをもたらず。他人が

それにこたえるか感謝するかは問題ではない。うわへの結果も問題ではない。創造主は知っているのだ！

自分の幸福のために愛や喜びや平安を求めようとすることは、利己的になることである。他人のためにこれらのものを与えようとするときにそれが自分に返ってくる。そしてエゴを宇宙的な愛に変えるのである！

こうして氏はあざやかに私を真自我へつれもどしたのです。心の中で単なる信念にすぎなかったものが、心について十分に知る方向へ向かわせられたのです。生命のエッセンスそのものへ！ その夕方私たちは一体化していたのであり、今もなお一体化しており、人類のすべてが一体化しているのです。他人の方へ出かけて行くときは、すなわち自分の家族の方へ帰って行くことです。アダムスキー氏は他人の方へ出かけるために生涯をついやしました。そして万人のための愛・光・宇宙的な生命というギフトをもって家へ帰っています。

-7- 深い誠意、謙虚な素朴さ、高貴な品位、はかりしれない価値をもつ熱意、果てしない忍耐力と誠実さ。これらは地球人が偉人と呼んだ人々によって残され

た痕跡です。この人たちは気高い目標と高度な理想をかかげた知恵とビジョンを持つ人々であり、同胞にたいして憐れみと関心を持つ人々であり、ヒューマニティーにたいして偉大な物事を達成した献身的な人々でもありました。ジョージ・アダムスキー氏はこのような人たちの一人です。氏の思い出はそのまま希望であり、未来への約束でもあります。

注 アカシックレコード（「デレバシー」133ページ参照）

これは宇宙空間に満ちている想念帯であり人間から発せられた想念は消滅することなく肉体・ソウル・マインド（魂）、宇宙空間全体に記録される。宇宙内のあらゆる知識は空間にみこなる想念波動または振動でありそれが宇宙空間内の原子・分子に記録されるものと考えられ、聖書中では「記憶の書」として表現されている。いわば写真の感光板のようなもので、一度ネガが作られると何枚でも同じ写真ができるのと同様にこのアカシックレコードの読める人は、他人の過去世や過去の歴史などを透視できるものと考えられる。



<昭和51年度>

日本GAP総会大盛況!

G. Adamskiが設立したグループGAP(Get Acquainted Program)「知らせる運動」の日本支部の日本GAP(代表、久保田ハロウ氏)の総会が昨年12月11日(土)、所は、東京文化会館にて開催された。以下はメンバーの池田氏と参加を共にした編者の参加報告である。



金星のシンボルマーク
GAPのグループ
マークとして使用
されている

東京、やっぱり快晴!

午後12時14分、二人は、花の
東京の地を踏んだ。特急やまぼこ
で山形を8時前にたち、4時間余りの
汽車の旅だが、それほど疲れは身にせま
ってこない。汽車に乗り込む前からしき
りに夫気を気にしており、米沢から福
島にかけて猛吹雪であったため、東京も
そうであろうかとしきりに心配していた
が反面、必ず快晴だ、という確信めい
たのもあった。昨年の総会(50年度)で
久保田代表が、この語たのを記憶していたか
らである。

「GAPの会合で、雨だたり雲だたり

したためがない」と

案の定その通りになった。やっぱり
晴れた。それも大快晴だ!

ついにやってきた!

2時の開始時刻まで少々あったの
で昼飯を食おうということになり、その
辺をふらふらと始めた。どうも東京
に来て、いるという感じが全くない。山形と
は確かに違うが、仙台の駅前通りを歩い
ているといった感じだ。

所収であるレストランに入った。二人共
五月四前後のものを注文し、これでも
最低のもの高い、軽く腹ごしらえ
をしたあと、いよいよ目的地である上
野公園内の東京文化会館へと足を向
けた。昨年この上野公園不安定にやっ
て来た。たまたま、などと思いつながら、しかし
今回は余裕シクシクである。

十分たためうちに「ガイビル」デズ
が目前に開けてきた。思わず「ついにやっ
てきた」と叫びだす。しかし、池田は

平静なもの、会場の東京文化会館は
国際的に名高いオーケストラの演奏会場
のようで、それだけに輝やかしく見える
ものである。

後悔先にたたない、デズ

エレベーターは使用せず階段を上げ上
がった。このとき池田が「この語た」階段
は登るためにあるのデズ。

ほとんどすべてが昨年と同じである。しか
し昨年のこのとき緊迫感はない、よき相棒と
いるせいであろうか。受付を済まし席に着
て、このころ、もう半分がうまづいて、
しまった、このころ、理想がわき起こった。
昨年とはまるで違う。今回は総会の模
様の録音を第一目標としていたため前
列に位置を定めるつもりでいたからである。
そういえば、過半数のメンバーが大小さま
ざまの「リフト」リフターを持参している。
このことは昨年見られなかったことである。
とかいって、同じメンバー考えることは同
じだ、な、と一種の同朋感をも感じた。

現在GAPの会員は全国に散在し、千五百名程度であるが、この総会に出席されたメンバーも老若男女さまざまである。おそらく最終的には二百名を越えたと思われるが、その割に会場が狭く、四時間立ち通しという方々も随分いた。われわれは中央付近に座を占めたが、前に座りたいなどというのはゼイタクすぎるくらいである。二階に上り、自分の軽薄さを恥じた。

創らの壁には金星の円盤と母船。そしてオーソン・ウェルズそれに格調高いアダムスキーの大型写真などが飾られている。環境バザンの中で、開会を待った。

久保田代表登場、二年ぶりの再会

開会時刻の二時を回り、まずあこいつに大阪で活躍されておられる片京氏が立た片々を昨年も見ていたの二種のなつかしさを覚えた。簡単なプログラムの説明のあと、遠方から来られた方は高い出費を払って来られたのだから特に聞き流すことのないように、そして総会を盛り上げて

ほしいと結び、いよいよ久保田代表の公演に始まった。もうすでに「アダムスキーは作動し始めている……」

「ええ、本日は多数御来場頂きましてどうもありがとうございます。」「……一年ぶりで聞くまでである。ウン、いゝと思ひながら、熱心に傾聴する。池田他のメンバーも同様、代表の個性が顔と声に目と耳を向け始めた。

写真はダメ……

この場面をカメラにと思い、池田に催促してみた。彼は小型カメラを携帯していたのだが、い意に反して「ダメ」と言う。なんでも視野が狭いのが暗すぎるから、いゝでもシッターを切るうとない。ようやく説得させ、二枚撮らせたが見込みはない。いゝ。少なからずモジモジしてしたが、すべてに満足して代表の語に聞き入った。

ブラザーズは地球人に全く興味がない

久保田代表の講演は始まった。本園はミシガ州、ロイドにおけるアダムスキーの發より二週間ほど前の講演の録音テープの公聴である。なんでもこの講演はアダムスキーの総決算的性格を持つものである。いゝ。實際さうであった。アダムスキーの声を初めて聞く。何ともびびきある、投げやりな口調だが、これも真理を伝えんとする氏の熱意によるものであろう。アダムスキーが数十秒語つた後に、時折解説をまじえた日本語訳を公開する。なほが二音の音がとても合致しており、一体性を感じる。

アダムスキーは語る。「勿論英語で」「地球人は死んだ。いったい何をやってるんだ。」「ミッパルを強めた。たまたま暗る。ヤリに」「ブラザーズは地球人を救うてはれない。彼らはそれほどにはない。自分で自分を救つ以外に全く方法がない。」「そして「ブラザーズはわれわれに全く興味がないんだ。」「いゝ。シキングなることまで言う。さらに「ブラザーズは地球の核戦争を非常に警戒している。いゝ。なぜなら地球人が核戦争を、

始めれば、地球は確実に破壊され、地球のみならず太陽系内の全惑星がバグニスを失つたのである……

代表の講演は約一時間半ほどして大団円の中に終了した。奥にまぼろしかた。10分間の休憩後、次に登壇されたのは透視術者として名高い、龜田一弘先生である。先生は代表の講演中、代表のそばにアダムスキーの姿を見たそうである。おどろいた。

先生のお話しても盛況のうちに幕を閉じ、すぐに再び代表の語になる。アダムスキーやJ.F.O.の問題について述べ、J.F.O.の研究とは人間研究である。いゝ。J.F.O.を出され、また食糧不足による第三次大戦を示唆し、要は自分自身を助けることだ。いゝ。力説された。その後いくつかの質疑応答がかわされ、再び片氏の開会のいゝ。と共に無事幕を閉じた。もう定刻の六時である。その後いゝ。思慮にまぼろし。ほんどのメンバーが帰られた頃、私と道は久保田代表と束の間、の会話をまじえた。アア、来てよかった。喪失を気分外に出た。もうネオンがきこえていた。

UFO

古代遺跡と



山口 博之

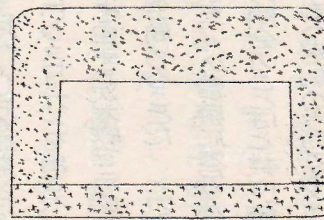
僕はUFOというものを理解できていないが、近頃エーリツヒ・フォン・デニケンを代表とする一つの運動があつて宇宙考古学なるものが騒がれている。今年には特に日本に来ていろいろなことを言っていたようだ。僕もその時は丁度テレビを見ていたのでデニケンの説明と彼がいふところの遺物なるものを発見したので、僕が記憶にある範囲で彼が取り上げた遺物に対する通説なるものを述べてみようと思ふ。

ただしここで諸君にわかってもらいたいことは、以上のようにな大そうな書き出しをつけてしまったが、僕は決して去ろうとしない。いや僕はそれにたいして一抹の共感を覚えるのである。つまり僕等は種々の方向より、一つの物体、いや物質を凝視することによって成長するのだからである。

鬼の雪隠、鬼の祖

僕は今年の夏、奈良を通る機会を得たので一日飛鳥を見て歩いた。そのときに百舞台、鬼の雪隠、鬼の祖、亀百とあるを見ることのできた。たしかデニケンは鬼の雪隠の方を指さして種々のことを言っていたように記憶している。これらは名前から想像するに何か恐ろしい物を背景にしているような感じを受けるが、普通は古墳の盛り土がばかれば落ちて石室がこぼれたものとして置かれている。事実奈良県の古墳にはこの形態を取るものが見られる。

益田の岩船

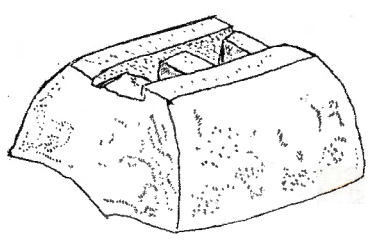


2つが合はせて一つの石室となる

鬼の雪隠

鬼の祖

これを僕は見ることはできなかったが、本の説明によれば大きさは長さ十一メートル、幅八メートル、高さ四・七メートルの巨大な石造物であり、上の面を平坦にして四角の穴二つをあけてある。古墳であるとか、占星台であるとかの説がある。ただし何の為にとつて作成したのかは全く謎である。デニケンはこの石造

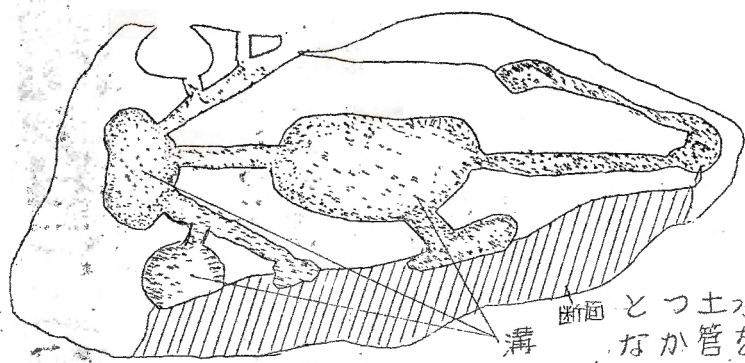


と遺跡の立地状況とは大変重要な関係にあるので、この問題はもっと突っ込んで調べても良い気がする。

石舞台古墳

巨石を使用した巨大な横穴古墳で、天井石には重さ七十五トンの巨石を使用している。蘇我馬子の墓とする説がある。デニケンはこの石室の上方にある石の結晶体の方向を問題としていたが、僕には良くわからなかった。ただこれは日本最大の古墳であり、全くその雄大なスケールには驚くより外にはない。もととは上円下方墳、つまり下の方が方形、上の方が円形を程していたらしいと言われている。

酒舟石



長さ五・三メートルの石に円形の溝を刻り込んである。実際の用途は不明である。伝説として酒をしぼる槽とか、油や薬を作るための道具とか言われている。ただこの石の東四十メートルのやや高い所で、ここへ水を引くための土管や石樋が見つかっている。となりにある庭園の施設だという説がある。壺を流してその間に和歌を詠む遊びがある。その為の石なのではないかと庭園施設と見た場合、合はるが。

実際に壺を流してみると、溝が浅くて流れないそうである。なお、これは少年マガジンの三つ目がおるで大変有名である。

ほかに僕は亀岡の土偶縄文晩期、今から二千年くらい前のものを書きたいのであるが、あまり力がなく書いてきけなかった。ただ今まで述べてきたのは所請者古学的に言えることであって、全ての定説ではないのである。ここをよく分かって欲しい。

参考文献
奈良国立文化財研究所
飛鳥資料館案内
古代史発掘第九巻
埋れた宮殿と寺

空飛ぶ円盤とアダマキ 久保田八郎 編
空飛ぶ円盤の真相 G. アダムスキー 高文社 980円
空飛ぶ円盤は来るのか F. ストラフリング 文芸春秋 250円
私は円盤に乗った! ダニエル・フライ 三バース出版社 250円

宇宙からの訪問者との邂逅

田中潤子

まだ中学一年生のころだったと思う。友だちとの学校の帰り道に、北の空にうかぶ、黒くて丸い物体をみつけた。今考えてみて、そういう物体であったと思うのであって、印象深いでき事だったが、それについては、はっきりしないのである。ただ私たちは空をみあげて、何だかんだと思うことをいいあいながら、ずいぶん長いこと道路のまん中になっっていた。大人もふしぎがって、いっしょに足をとめて見上げていた。

しかし物体が視界から消えてしまうと、大人たちは、「気象台からの風般でもとんできたんだベエ」といって、今まで口をあけて見ていたことも忘れて、すぐに現実にもどった。

大人たちとは逆に私たちは、何だかわくわくして宇宙人について議論した。地球にしか人間がいないのだということはおかしい。他の星にも生物がいて、もちろん地球より進歩した文化をもっているはずだ。

と言う者がおり、また宇宙人は地球人を侵略しに来ているのではないかと不安がる者もいた。私はその時何故なのかわからないけれども、「あれが円盤であつたらいいなあ」と考えたものであった。

実際には、大人がいったとおりだったかもしれないし、今考えてみると円盤ではなかったような気もしてくる。しかし、あんなに長い時間みえなくなるまで空にくぎづけされたのは、誰しも他の惑星に本当は生物がいるのではないかと考えているからではなからうか。その生物に恐怖を感じる人や征服欲を感じる人さえあるかもしれない。それほど人間はまだ『迷い』の状態にいるのではないだろうか。そして『過ち』へと進もうとしていると考えられる。

この夏、私は山口緑君のおかげで、アダムスキーの著者に出会うことができた。これには私をよろこばせ、不安に答えてくれることが書いてあったのである。

まず巻頭の写真はどううたがう余地のないこと。私もこれは絶対であると信じこんでいる。写真で気をよくして「いいぞ、いいぞ。」などと口ばしりながら、本文を読み進めるうちに、何か崇高な気持ちになり、それとともに著者の謙虚さが伝わってくるようになった。

他の惑星からの訪問者の目的はありがたいことには、地球救済にあるという。そして地球人の中には、いつて生活をしている者さえあるという。これには私もおどろいてしまった。

地球には多くの矛盾、悪、憎しみ、俗的欲求などがうずまいていて、核実験などの過ちまでおかし、地球の危機をまねいているのである。この危機にある私たちは、彼らをどのようにとらえればよいのか。アダムスキーははっきりとそれを示唆している。

彼らの生き方は想像もできないほど高尚であり、創造主の英知に従っている。その他の惑星の高度な文明をもった同胞たちの、進んだ科学や精神を私たちが包容的な心をもって受け入れることが必要なのである。

しかし、宇宙人が地球を救ってくれるという安易な、受身的な態度で生きるのではなく、何物をも受

け入れようとする、オープンマインドの積極性をもった態度で生きるべきであると思う。
私たちが、将来の宇宙時代を生きていく時の手本となるばかりでなく、現在の地球人の生き方を示しているのだと思われる。

質疑応答

問 相手を宇宙人と見分けるには？

答 あなたがゴム手袋を着けないで、絶縁されてい
ない生きた電線を握れば、電流のショックを感じる
でしょう。しかしゴム手袋を着ければ何も感じられ
ません。これと同様に多数の人々は宇宙に会ってい
るのですけれどもそれに気付かないのです。宇宙人
は見たとこ普通普通の地球人と変わりません。したが
って相手の人柄によつて見分ける以外に方法はない
ません。だからあなたが相手を宇宙人だと見抜くに
は、直感力を出させないゴム手袋(障害物)を捨てなけ
ればなりません。その際テレパシーが最も有力な手段
となります。

(空飛ぶ円盤とアダムスキー 93ページより)

連載第1弾!

「空飛ぶ円盤とアダムスキー」の

土星旅行記

ジョージ・アダムスキー (1)



一九六三年三月二十七日より三十日まで土星上で行なわれたこの大冒険の土星の代表者会議に出席した際に聞ける報告。

● 第一部

二十六日に私は一機の宇宙機に乗ってこの旅行に出発しました。この宇宙機は二十四日に米国のある航空基地へ着陸しましたが、そこで米政府の一高官がその宇宙機の乗組員と会談をしました。この会談後、宇宙機はもとの惑星へ帰ることになったわけです。この宇宙旅行は時速二千万マイル以上ものスピードで九時間ほどかかりました。主な会議は二十九日と三十日に開かれたのですが、私は二十七日に着したときに出席者の殆どに会いました。二十八日は会合はなくて、訪問者は都市や周辺の見学に案内されましたが、それは言葉ではあらわせないほどに美しい光景でした。建築物や大通りなどの壮麗さは信じられないほどです。ここで私が大通りというのは、地球で私たちが知っているような種類のものではありません。地球のコンクリートまたはアスファルトのようなものではなくて、何マイルも何マイルも花がしきつめてあって、各大通りが異なった

色を帯びています。

土星の乗物には車輪がありませんので、地球にあるような種類の道路を必要とせず、ただ進行路線があればよいのです。この各路線というのは横幅の広い花壇なのであって、この上の空間を電磁作用で進行する乗物が植えてある花を傷つけないで滑空するのです。私たちは多くのこうした大通りを進行しましたが、先にも述べましたように、すべてがあまりに美しく地球の言葉ではとても表現できません。

目撃したとおり、正確にこれらの光景を私が思い浮かべるにつれて私の心の中を写真に撮ることができればよいと思います。私はカメラを携行して写真を撮りましたが、地球へ帰ってフィルムを現像してみてもそれがすっかりだめになっているのがわかりました。カメラさえも元のままには作動しません。どういうわけか私にはわかりませんが、たぶん船体の磁場がフィルムを傷つけたのでしょう。

私は次のように言うことができます。土星の建築様式はわれわれの想像を絶したものであると。遠くから見れば都市は白く見えますけれども、そのなかを歩いたり乗ったりして通過しますと、各建物やその他一切は乳白色を呈しています。それは息のつま

るような体験でした。建物の幾何学的な構造があまりに美しいからです。それはわれわれがこれまで教えられた天国そのものであると言えるでしょう。人々は一大家族として住んでいます。この地球上の兄弟姉妹よりももっとすぐれた生き方をしています。土星人はわれわれ地球人がいわゆる神にたいして敬意を払う以上にはるかに大いなる敬意を人間同志が互いに相手にたいして示し合っているのです。だれでも完全な調和を感じることができました。というのは、われわれが地球で知っている素晴らしい音楽においては多くの音符が一つの美しい旋律をつくっているのと同様に、宇宙の法則という関係においてそれは最低から最高に至る多くの心を含んでいたからです。まただれも土星人の想念や行動によって彼らのあいだに全くいささかの疑いや不信をも感じることとはできませんでした。

もちろんわれわれすべてが知っているように、土星は天びん、すなわち完全なつり合いを表わしています。そして一度そこへ行ってみればこれを疑うことはできません。しかも土星人は宇宙の生き物のあいだにより大きな美とより大きな調和があるのだと言っていました。

われわれの現在の精神状態からみれば、われわれはこのことを全然理解できないようにも思われます。しかし、われわれがこの素晴らしい生命の計画に自己をゆだねるならば、それはわれわれの理解するところとなります。私は何度も考えることがあります。この地球上のすべての人間はかかる大きな名譽を受けるように自分を向上させるのだろうか。地球的な見地からみますと、ときとして少数の人だけがこの特権にあずかるのだろうと思われます。地球人の心はあまりに個人的な努力に熱中していて、容易に腹を立てるからです。このことはすでに長い時代を通じて行なわれてきましたので、次のような質問が起こってきます。「創造主から与えられた生命の充実にたいする権利を得ようとして、一体どれほどの人が努力しているだろう？」そこで私は永遠なるものを考えてきました。そのなかに万人が含まれていきますので、そのためにいつかはだれもがそれを行なうでしょう。或る人は早くそこへ到達するでしょうし、数十億年かかって到達する人もありましようし、なかには全然到達しない人もあるでしょう。われわれの自我または個性を創造主の意志にゆだねることは容易ではありません。しかし自我にどのような犠

牲が起ころうとも、それは努力すべき事柄なのです。次のように言う人があるかもしれません。「もしわれわれが自我または個性を捨てるならばわれわれは間抜けになるのではないかと。そうです。地球的な見地からすればそれはほんとうです。しかし人間は創造主の意志に向かう以上に大きな間抜けになることができるでしょうか。自我を捨てればあなたは創造主と一体になるでしょう。それが創造の目的なのです。われわれが黄金とか何とかの言葉で富を計っても、いかなる富といえどもかかる参与者になる人々を待っているところの報いをわれわれに与えることはできないでしょう。」

さて私が目撃した素晴らしい美を表現することは困難です。それはこの地球上のいかなる物をもほかに凌駕しているからです。われわれの取るに足らぬ心は攻撃的であるかもしれませんが、まだ目覚めてはいません。というのは、それは依然として永遠という子宮のなかにあって、創造主の目でもって実際に存在する物を見るかわりに、存在するかもしれない物を夢見ているからです。そうです。協力者のみなさん。私は今度の宇宙旅行で私に与えられた名譽をおわちする特権を授けられるために自分が

何をやったのか私にはわかりません。

もし私が知る特権を与えられた物事のすべてを心のなかに集めることができれば、一冊の書物が書けるでしょう。しかしおわかりのことと思います。が、例の世界講演旅行から帰って以来ずっと私には多くの複雑な状態が起こっていますし、また人間は二人の主人に仕えることはできません。それゆえ、私が美しい宇宙をながめているあいだに受けた印象のすべてが充分によりがえってくるのを待つことにします。私にはあまりに仕事が多すぎるのです。私は自分の義務を遂行することができるように必要な援助が現われることを祈っています。

援助する人はいかなる性質の疑惑をも起こすことなく、私が洩らす物事にたいして人間の心の素直さをそれは必要とするでしょう。

さて、土星の会議の説明を続けましょう。地球時間の三月二十七日に私たちは最初の会議を開きました。それは三時間続きました。各惑星から来た代表者が紹介されました。全部で十二名です。そして各目の惑星を表わす徽章を一同は授けられました。

-17- この会議は、その都市の小さな会合や演劇の上演のような諸活動の集合場所として用いられる或る建物

の中で開かれました。

二十八日は休養や見学のために費やされました。二十九日にぎわめて美しいデザインの建物で主な会議が開かれました。操作はすべて押しボタン式です。会議の後に一同はこの操作法の説明を聞きました。まず床を片づけてから、ボタンを押すと会議用の準備のできた議場が床の下から現われてくるのです。四方の壁も必要に応じて調節できるようにになっています。会議のあいだそれらの壁は優美な紫色に輝いていて、黄金色の模様が浮かび、ぎわめて高い柱がついていました。一同がすわったテーブルは長くて片側に六人がすわり、端に十三人目の議長がすわりました。テーブルの端から端までにはまんなかになぞのくぼみが貫いていて、そのなかに十二の噴水がしつらえてあり、一つの噴水が各代表者の前になるように位置しています。各噴水はそれぞれ異なる色と芳香を放って、建物中にころよいふん囲気を生み出しながら一体となって混ざり合っています。その噴水や天井、各壁などから音楽が流れてくるように思われましたが、地球には全然ないような音楽でした。それは宇宙のあらゆる活動の音響の融合であり、木々のあいだを流れるそよ風またはさざ波の音



米國GAP本部 現在アムステルダムのアリス・ウェルズ
とマサ・ウルリッヒがここでア氏の志を同様に伝え続けている。

にたえてよいでしょう。地球人に知られているあらゆる音や未知の多くの音が完全に調和して融合した音楽です。そしてその旋律がどのようなものであったにしてもそれは地球人の理解力を越えたものと思われまふ。私にわかったところでは、その音楽は

創造主にさげられた創造の表現なのでした。会議用テーブルの所で着用するため各人は長い外衣を与えられました。私に渡された外衣は優美な青色のものでしたが、実際にはその色を言葉で表わすことはできません。右袖には一輪のバラ様の刺繍が施してありましたが、そのバラは私が見たことがな

いものです。そのバラのトゲは地球上の生命を表わしていました。そしてそれを見て私はイエスの次の言葉を思い出しました。「わが道はイバラで満ちている」

議長は宇宙の諸原理を表わした乳白色に反射する外衣を着用していました。その十八時間の会合のあいだ地球時間に換算して私が感じたのは、私はもはや自分自身の心を持たず、また個人という感じも起こらず、むしろ宇宙的感覚をもって最高の知識の中にみずからを表わした或る完全な実体と調和している一つの重要な部分としての自分を感じました。

議事として最初に出た話題はこの太陽系と地球に関する問題、太陽の磁極の逆転とそれが全惑星群にどのような影響を与えるかといふ事柄です。論点は次のようなものでした。すなわち、われわれの太陽系は崩壊期にあるのか、もしそうだとすればいかなる処置をとればよいか、といった問題です。長時間にわたる熟慮の末の結論は確定的なものではありませんでしたが、しかし科学装置に示される測定によつて発生しつつある諸変化が記録されていますので、太陽系が崩壊期にあるということになれば数年以内にそのことがわかるでしょう。(以下次号)

続・PRS愚話 PRSの煮会

え〜と、今から1ヶ月以上も前の9月30日に、馬見ヶ崎の河原でPRSのいも煮会が、大々的に行なわれました。参加人数は、女の子の方3名、高野サントナジュン(田中さん)私×。男の子の方4名 Capの糸糸君、グッタン(山口博士さん)コマンチ君(高野サントナジュン)、BON君(海部利雄さん)、の総計7人でした。この日は、女子大に恵まれ、木曜日にちかかわらず、他の人達もあちこちでいも煮会をやっていました。馬見ヶ崎の河原は、本当に私達学生、いや庶民にとっては憩いの場なのです。泉政100年、よくぞこのような遊興の場を設けてくれた知事さんに感謝したいです。

話は変わって材料などの買い出しは、糸糸君とBON君がオートバイで「お買物かならミツマス。今日お買物はミツマスね。」に行きまわりました。いも、ころりん、コンニャク、ネギ、油揚げ、豆、味噌、ウイスキー、しょう油、味の素、砂糖、で味付けをしたのでした。味の素、砂糖などは、コマンチ君がわざわざお家まで取りに行ってきたのです。その早技は、まるで円盤に乗って風の如く現われたような感じです。コマンチ君が一瞬、ブラザーのように見えたのでした。(フッ、ウソギョーッ)

いもが煮えたので、2つのナベを囲み、ウイスキーとぶどう酒(糸糸君持参)で酒盛りをはじめたのでした。任意には、お酒がビョウッ合気は、昔から慣習化されていましてから、我がPRSも例外ではなかったといえましょう。(!!??) それから、今回の会費は、1人500円でしたが、ウイスキー「EXTRA」(もちろん2級品)を買ったので、700円足なくて、糸糸君が負担してくれました。その不足分を徴収して下さい。(はいわかりましたお1人¥100になりますマシ...)。そして、このウイスキーは一応私の所にあります。PRSの会員で飲みたい方はいつでもおいで下さい。裏門(山形大学)より、徒歩30秒です。しかし、このウイスキーの保存量の有無に関しては、一切責任を負がさせていただいておりますので、ビンが存在確認とだけなても御了承下さい。

まあ、ざっとこのような感じで、最後にソフトボールをやってお開きにしました。(実はその後、グッタンの住み家でコマンチ持参の玉うどんを食べたのです。コレホスト...) 今後の催し物には、もっと々々々のPRSの会員の方が、参加するようにしましょう。オワリ。(ツタナイ文章デジタ)

(小松文子記)



久保田代表より

書簡届く

先の日総会後久保田代表が編者に親切に御手紙を下されたので、ここに掲載致します。

前略、先日総会

には遠路はるばると御出席頂き、厚く御

礼を申し上げます。総会の感想

は如何でしたか。私としては精

一杯の努力をつくしたつもりで

したが、どうも皆さん方にあま

り御満足頂けなかったのではない

かと思っています。中略

総会の終了後に時間があれば

ゆっくりとお話し致したかった

のですが、そのヒマがなくて全

く残念でした。でもまた機会が

あるでしょう。

事業をやっていて、さまざま

な事態に直面しております私は

この頃、地球人というのは全く

の死人の集団ではないかという

気がします。これは自分だけを

覚者とする不遜な言辭ではなく、

どこを見ても、だれを見ても、

「創造のパワー」というものを表現

化していないために、そのよう

に見えるのです。むしろ動物の

方のはるかに「生命の表現体」とし

て生きているような気がします。

その意味で、あなたの写真に写

っている小山手などは美しい限

りですね。

山形地方はもうかなり雪が深

いのでしよう。東京にいては想

像もつきませんが、雪の美しさ

は充分にイメージを描くことが

できます。

来秋、できればまたアメリカ

へ行こうかと考えています。

御元氣でお暮らし下さい。御家

族の方々や池田さんによろしく御

伝え下さい。十二月二十日

久保田八郎

山口緑様

新メンバー紹介

伝言板

- PRS週会は当分の間山形大学教養部2号館にて、毎週木曜日 12:00-12:30 PM.に行ないますので是非出席下さい。
- PRSメンバー間に情報交換、相互理解を目的に、ノートを取らせましたので、回した際には何なりと書き、次のメンバーに渡して下さい。
- 先の月例会でGAP総会の録音テープを一部公開致しましたが、まだ聞かれていない方、新たに聞き返したい方は、編集まで申し込んで下さい。
- いずれ再びアダムスキー哲学書を中心とした書物の刊行購入を計画しております。特に今回より『テレパシー』をテキストとして研究したい考えですので出来るだけお求めになって下さい。
- 編集者の電話番号は・・・ 02367-9-2555 デス
- 渡部利之君の電話の局番変更 (32)1020 → (45)1020 デス

PRSのシンボルマーク募集

編集後記

長らくお待ちいたしました。ここに二ヶ月を越えてお届けします。昨年中に出す予定でしたが、編集者の無力量のために遅れてしまいました。しかしながら、創刊号よりも内容的にもさらに充実したのではないかと思っています。これも皆様の厚き御援助があったからこそであり、特に親類にも寄稿して下さい。方々に深く御礼申し上げる次第です。とにかく20ページが達成できたことは大きな歓喜です。

皆さんには申し訳ないことですが、本日より頒価100円に引き上げます。やはり何をか一つとする場合、先立つものは力であり、どうにもしょうがありません。余剰金はPRSの活動資金にしたいと考えです。

トップ記事、アダムスキーのアダムスキーの思い出は、GAP編集長ター49号に載ったものですが、ア氏の人物の面をのぞくことが出来ると思います。特に「創造」までは知っているのだ。この二ヶ月集にはものすごい内容があると思います。熟読して下さい。

また、今回より、教回による連載でアダムスキーの「星旅行記」を掲載いたします。

また、PALACE of PRSのノートに、皆人からの意見、感想、情報などを発表することに致しました。本誌やPRSの運営に何なりと御意見をお寄せ下さい。

この世界で自分の身を保つてくれるものが自分以外誰がいるでしょうか。世間では、私と社会的地位を得ようとする自分の相手をばっか。あつちの世間目的に生きています。久保田代表の言う通り、私たち地球人は「創造のバウ」を現わすために全くの死人ではないでしょうか。自分を誰か助けてはくれませんが、自分で自分を助ける以外に全く方法はありません。このまま私たちがエゴをむき出しに生き続けるならば、永遠に生命の光を照らすことなく宇宙の墓場に葬られることになるでしょう。これは単なる空想的で宗教的説教ではありません。事実なのです。

その意味でPRSでは真実を知り、宇宙の英知に気づくために三バナー開発を中心とした自己訓練を本格的に開始いたします。意欲ある方、共にやってみようではありませんか。

PRSSHメンバーサルメージ2
一九七七年一月十五日発行
編集者 山口 緑
発行所 PRS
頒価 100円

